



(大阪西南部)

大阪・堺環濠都市遺跡

- 1 所在地 大阪府堺市宿院町東三丁
- 2 調査期間 第428地点 一九九四年(平6)一月～四月
- 3 発掘機関 堺市教育委員会
- 4 調査担当者 十河良和
- 5 遺跡の種類 都市跡
- 6 遺跡の年代 室町時代～江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

堺環濠都市は、一四世紀代から都市としての形成が始まり、文明元年(一四六九)以降に遣明船の発着港となったことが商都としての地位を不動のものとした。また、戦国大名や仏教

教団の支配を受けない自治都市として繁栄したが、慶長二〇年(一六一五)、大坂夏の陣の前哨戦による大火で、都市の全域が焼失した。二点の木簡が出土したの

は、真東西方向に延びる濠

SF〇一である。堺の町は二重の環濠で周囲を囲まれ、町中にも濠が縦横にめぐっていたことが発掘調査で明らかになってきた。当地点のSF〇一は町の外郭を囲う濠で、二重にめぐらううちの内側にあたるものである。その規模は、当初の幅一・一m以上、深さ約一・九mを測る。掘削の時期は不明だが、一六世紀第IV四半期(天正後半から文禄期)に半分以上の幅に狭められるのを嚆矢として、三次にわたる埋め戻しが行なわれ、一七世紀第II四半期までには完全に埋没する。濠の埋め戻しに関しては、天正一四年(一五八六)に豊臣秀吉の命により埋め戻されたとの記述が『貝塚天満移位記』にあり、SF〇一の最初の埋め戻しの時期と符合することが注目される。

(1)は、当初のSF〇一の滞水層に覆われる、濠底の土坑より出土した。土坑の埋没時期は、共伴して出土した最新相の遺物が一六世紀中頃の土師質土器であることから、その頃と考えられる。

(2)は、当初のSF〇一を埋め戻した客土層から出土した。埋め戻しの時期は、前後の層位の出土遺物から、前述の通り一六世紀第IV四半期と考えられる。

8 木簡の釈文・内容

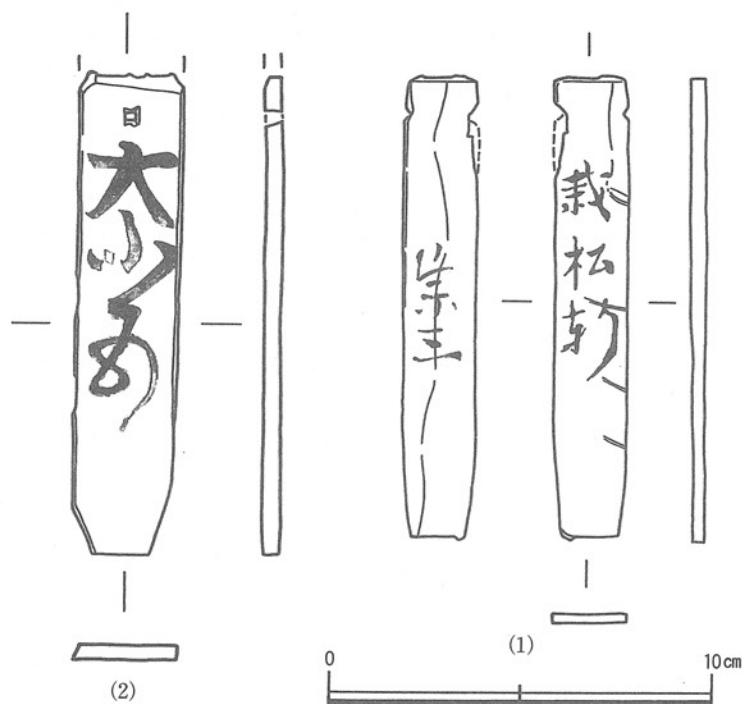
- (1) ・「<裁松軒」
・「> 宗三」
(122×19×4 032)
- (2) ・「少五口」
(127)×25×5 059

(1)は、上端の切り込みの一方が欠失する他は原形を保つが、上下の端部は切断の仕方が荒く、折損に近い。墨書は両面に行なわれる。

「栽松軒」は、臨済宗大徳寺の第九十世住持をつとめた大林宗套だいにそうとうが天文一〇年（一五四一）に大徳寺大仙院の西隣に建てた居所とされる（「特賜正覚普通国師塔銘」「堺市史」第四巻資料篇一）。大林宗套はその後弘治二年（一五五六）に、堺市南旅籠町東に所在する同派南宗寺の開山の第一祖ともなった。一方、裏面の「宗三」については、大徳寺とつながりがあった堺の商人や戦国武将は、法名に「宗」の文字を用いる例が多いので、「宗三」も法名を意味すると思われる。「宗三」を法名とする人物としては三好政長が知られている。

三好政長は天文一八年（一五四九）に同族の三好長慶に攻められて敗死しているが、三好長慶は大林宗套への帰依が篤かった。大林宗套が居住したという「栽松軒」と、三好政長を指すと思われる「宗三」が表裏に記されるこの木簡は、三好氏と大徳寺、特に大林宗套との関係を考える上で興味深い資料である。

(2)は上端部が折れているが、穿孔の位置から大きくは欠失していないものであろう。左上部は斜めに切られており、切り込みがあった可能性もある。下端部の側面は削られて、幅が狭められる。穿孔は一辺約4mmの方形で、表面から穿孔される。墨書は何らかの数量を示すものと考えられるが、その意味するところは不明である。



9 関係文献

堺市教育委員会「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告—SKT42
8地点・堺市宿院町東三丁—」（「堺市文化財調査概要報告」六七 一九
九七年）
（十河良和）